

コンディヤックの起源への問いとデリダの読み方

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-09-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 上利, 博規 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00009105

コンディヤックの起源への問いとデリダの読み方

上 利 博 規

はじめに

18世紀には起源をめぐる数々の問いが起こったが、その一つにコンディヤック (1715～1780) の『人間認識起源論』(*Essai sur l'origine des connaissances humaines*, 1746) がある。コンディヤックは神父ではあったがサロンなどでソーやディドロたちと交流をもち、『人間認識起源論』、そして『体系論』(*Traité des systèmes*, 1749)、『感覚論』(*Traité des sensations*, 1754)、『動物論』(*Traité des animaux*, 1755) などを執筆し、およそ10年間家庭教師をつとめたのちに、『教程』(*Cours d'études*, 1775)、『交易と政府』(*Le Commerce et le gouvernement considérés relativement l'un à l'autre*, 1776)、『論理学、または考える技術』(*La Logique, ou les premiers développemens de l'art de penser*, 1780)、『計算の言語』(*La Langue des calculs*, 1789) などを執筆した。

コンディヤックは、その著書『感覚論』『動物論』などからも推測されるように、ロック (1632～1704) の経験論の影響のもとに、ニュートンなどの自然科学的方法をモデルとしながら人間の知性・認識の起源を問うており、バロック時代の始まりと共にF.ベーコン (1561～1626) やデカルト (1596～1650) たちが開いた新しい学問への問い、そしてバロック時代中期のロックの『人間知性論』(1690) などを継承的に発展させたと考えることができる。しかし同時に、彼は『人間認識起源論』は、人間認識の起源を感覚に置くだけでなく、その第1部「我々の認識の素材について、特に魂の働きについて」において、第1章によって感覚と魂を区別した後に、第2章以下で「魂の働き」の生成過程を論じ、さらには第2部で「言語の起源」を問うている。

われわれはこのような「言語の起源」への問いに、ルターに象徴されるよう

な16世紀から始まるラテン語からの離反と国民言語の創立への動き¹が、ロックに代表されるような生得観念の否定と共に「観念と言語の結びつき」の問い直し、あるいはグレゴリオ13世による1582年のグレゴリオ暦の制定による起源との距離という直線的で均質的な時間測定という近代的年代学の始まり、及び大航海時代を背景とする世界地図作成と緯度と経度による均質化された数字的に算定可能な空間把握（とその方法としての直交座標）、さらには同じく大航海時代による多様な動植物や人間の生活形態の発見と古代のアリストテレス『動物誌』やプリニウス『博物誌』から近代的な自然誌・博物学への転換、など諸要素が絡み合いながらコンディヤックの思想の中に流れ込んでいるのを見ることが出来る。

コンディヤックが生きた時代において近代的な体系化への視線は、時間・空間のみならず、普遍言語など理想的な言語、起源からの生成、動物と人間の関係など、様々な領域においてそれらをクリアに見通すことを求めたのである。コンディヤックが『体系論』で抽象的・観念的な体系の無益さを批判しつつ（第2章～第11章）、新しい体系の必要を説くのもこのためである。また、彼の『動物論』は「第1部 デカルトの体系とビュフォンの仮説」でビュフォンの『一般と個別の自然誌』（1749）を批判しつつ、「第2部 動物の能力の体系」で動物について体系的に論述しようとする²。プリニウスに親んだベーコンが『大革新』の第3部として自然誌を書き、18世紀に入るとリンネの『自然の体系』（1735）、そしてビュフォンが現れた。そして、自然誌（natural history）は、様々な自然の集積としての博物誌から、近代的な時間意識の登場とともに様々な自然が時間の中でどのように生成してきたかを問題とする進化論的問いへと変化を見せ始めた。18世紀における生物学における進化論への移行の始まり³は、キリスト

¹ デカルトも『方法序説』で、「教師たちの言語であるラテン語ではなく、わが国の言語たるフランス語で書く」と述べている。

² その中には、「第4章 動物の言語」「第5章 本能と理性」なども含まれており、動物と人間の連続性への問いが立てられている。そして、デリダは『たわいなさの考古学』（*L'archéologie du frivole*, 1973, 1976, 1990、飯野和夫訳、人文書院、2006）において、「理性は本能である。理性と本能のあいだには程度の差しかない」（…la raison est l'instinct. Comme il n'y a entre raison et instinct qu'une différence de degré）と述べ、コンディヤックの『動物論』の最後で述べられている言葉を引用する。「これ（感覚をもつ存在）は獣としては、本能と呼ばれる知性の程度を有している。人間としては、理性と呼ばれる優れた程度を有している」（Il y a dans les bêtes ce degré d'intelligence, que nous appelons *instinct* ; et dans l'homme, ce degré supérieur, que nous appelons *raison*）（p.97、邦訳p.86）。

³ たとえば『人間と動物の起源』（1745）を著したモーペルテュイ（1698～1759）は、ニュートン物理学を生物へと応用することを考え、両親の生殖液体の中に今日でいうところの遺伝を司る粒

教的な人間理解から離れ、認識の起源、あるいは言語の起源への問いにおいて、動物とも共有している感覚から人間の知性がどのように生成するのか、そしてその生成過程は言語とどのような関係にあるのかを問うものであった。

以上のようなコンディヤックの『人間認識起源論』に対し、デリダ（1930～2004）はその序論として『たわいなさの考古学』を書いた。『たわいなさの考古学』の「訳者あとがき」でも紹介されているように、「たわいなさ」という言葉は、ロックが『人間知性論』の第4巻第8章「無価値な命題について」（OF TRIFLING PROPOSITIONS、大槻春彦訳、中央公論社・世界の名著32、1980）で取り上げられたものである⁴。ではコンディヤックは上記のような人間の認識の起源への問いにおいて、ロックがその第8章で展開している「無価値」あるいは「たわいなさ」をコンディヤックはどのように継承しており、なぜデリダは自身の著書の表題にこれを使用したのであろうか。

また、デリダにおいて「たわいなさ」はなぜ「考古学」と関係づけられなければならないのであろうか。「考古学」（archéologie）が「起源」（archè）と関係することは明らかであるが、それはコンディヤックをはじめとする17世紀、18世紀における様々な「起源への問い」とどのような関係にあるのであろうか。古代ギリシアにおける原理（archè）への問いと近代における起源（origine）への問いは異なったものであろう。コンディヤックは『人間認識起源論』において、あるいは『動物論』などで繰り返して‘origine’について語るが⁵、‘archè’については語らない⁵。また、コンディヤックの『人間認識起源論』の第2部第1章で展開した「起源の起源と進歩について」（De l'origine et des progrès du Langage）はルソーの『言語起源論』（*Essai sur l'origine des langues*、ルソーの死後1781年公刊）に大きな影響を与えたが、ルソーもやはり起源を‘origine’としている。同じくルソーの『不平等起源論』（*Discours sur l'origine et les fondements*

子のような物体があるのではないかと考えた。またド・メイユ（1656～1738）は『テリアメッド』（1748）において、すべての生物の起源は水生生物であり、水生動物が次第に陸に上がってきたと考えた。さらには、ボネー（1720～1793）は、生物の連続的な変化としての進化から生物の種を捉えようとした。こうして18世紀における動物への問いは、19世紀以降の進化論や遺伝学を準備した。

⁴ そのほかロックは「たわいなさ」について、「第3巻 言葉について」「第4章 単純観念の名前について」におけるスコラ哲学批判、同「第6巻 実体の名まえについて」においてある人を他の人と区別する固有名の問題として、「第4巻 真知と臆見について」「第5巻 真理一般について」において言葉を不要とする「心的命題」と言葉を使用する「言辭的命題」を区別し、さらに「言辭的命題」の2つの真理のうちの一つとして「純粹に言辭的で無価値なもの」（purely verbal and trifling）と呼ばれるものがあることを指摘している。

⁵ ただし、「原型」（archétypes）については何度か触れている。

de l'inégalité parmi les homes, 1754) も、また同時代のパークの『美と崇高の起源』(*A Philosophical Inquiry into the origin of our ideas of the Sublime and Beautiful*, 1757) も同様である⁶。ではなぜデリダは敢えて 'archè' を問題にするのか。

以下、17世紀、18世紀の様々な起源への問いをはじめとする近代的発想の展開の中で、コンディヤックの『人間認識起源論』がどのような意味をもつものであるのか、動物と人間を連続性の中で科学的に捉えようとしていたコンディヤックにおいて、感覚と魂と観念と言葉の関係はどのように考えられていたのか、さらにはそれがいかなる意味で「たわいなさの考古学」と呼ばれ得るものであるのか、こうした問いについてデリダの著書を手掛かりに考えたい。

第1章 archèへの問い、すなわち形而上学

第1節 コンディヤックと形而上学

哲学はタレスから始まるといわれることが多いが、それは周知のようにアリストテレスが『形而上学』においてそのように語ったからである (A 3. 983 b)。タレスが万物の構成要素として水を選んだのは、すべてのものの種子は水気のある自然性を持ち、水こそ自然の原理 (archè) だという理由からであろう、とアリストテレスはいう。タレスをはじめとして彼らは自然哲学者と呼ばれるが、この場合「自然」は非生物も含まれるが生物も含まれる⁷。(しかし、今日『形而上学』と呼ばれるアリストテレスの著作は、周知のようにアリストテレス自身による命名ではない。)

デリダは『たわいなさの考古学』の冒頭で、コンディヤックの『人間認識起源論』は、形而上学を批判することによって初めて可能になる「名を持たない学問」の扉を開くものであると述べている。しかし、コンディヤック自身は『人間認識起源論』の序論の冒頭で、逆のことを述べているように見える。すなわち、「精神を明晰で性格で広闊なものにするのに最も役立つ学問、それゆえ他のあらゆる学問研究の前に準備されねばならない学問、それは形而上学である」(La science qui contribue le plus à rendre l'esprit lumineux, précis et étendu, et

⁶ そのほか、モーペルテュイの『言葉の起源と語の意味作用に関する哲学的省察』なども同様である。

⁷ たとえばアリストテレスは『魂について』において、自然哲学者たちが魂も磁石も宇宙において動くということを引き起こすものを包括的に archè と呼んでいると指摘している (A2. 405)。

qui, par conséquent, doit le préparer à l'étude de toutes les autres, c'est la métaphysique) と述べている。コンディヤックが形而上学に期待を寄せるのは、それが幾何学と同じような「正確さで推論」でき、幾何学と同じように「適切な観念」を作り、「精密かつ確固とした方法」で規定することができると思いついたからであるという（序論）。

コンディヤックの言い方によれば、それは「人間の精神の限界内に踏み止どまる術を知っている」「慎ましい形而上学」であり、本性・本質などを解明しようとする「高望みをする形而上学」とは異なるものである。コンディヤックは繰り返し語っている。人間の精神の研究は、「人間精神の本性を発見するための研究」ではなく、「精神の様々な働きを認識すること」でなければならない。そのために、コンディヤックは、様々な経験を説明するのに十分な「根本的な経験」(première expérience)を見出し、そこから認識の源泉、認識の素材、原則、道具などを示すことができると考える。すなわち、経験から非経験的な何か、たとえばアイデアであるとか神であるとか、そうしたものへの超越を志向する形而上学ではなく、人間の精神の起源と生成過程を遡行的に振り返りつつ、そこに既に自然なものとして働いている精神の活動を見出すのである。したがって、コンディヤックの目指す「慎ましい形而上学」(métaphysique)は自然として既に働いている経験を見出すことである。

しかし、それはロックの経験論と同じなのではないだろうか。デリダは、『百科全書』におけるダランベールの「ニュートンが自然学を創造したのと同じように、彼(ロック)は形而上学を創造した」(Locke créa la métaphysique à peu près comme Newton avait créé la physique)という言葉を用いながら、コンディヤックもきっとこの言葉に同意するだろうという(p.24、邦訳p.18)。つまり、コンディヤックの考える形而上学とは、人間の自然としての精神活動がいかにして生まれて現在に至ったかを振り返る「反省」にほかならない。したがって、「反省」としての形而上学は事実に基づくものであるから、人間の精神とは何かということの本性的に論じることはできず、歴史的過程を振り返ることでしか獲得できないものであり、さらには「反省」を行う時点において既に現れたものしか「反省」できないわけである。そして、ベーコン以来の17世紀と18世紀のバロック時代において新しい学問において諸観念が形成されてきたという事実、学問の進歩という歴史の先に、コンディヤックの経験という人間の自然の「反省」としての形而上学が生まれたといえよう。

第2節 言語という archè

もともと古代ギリシアにおける自然哲学者において、archèという言葉は多様に用いられていた。たとえばある者はそれを実体的、元素的に捉え、ある者は特定の実体ではなく、それらを運動させる力のように捉えた。

そして、既に述べたようにコンディヤックもまた、人間の精神の、あるいは観念の起源とその生成過程を一つの運動として考えており、コンディヤックの形而上学も人間の自然としての精神の活動がどのような力によって営まれているかを問う。経験論の立場から言えば、確かに知覚あるいは感覚がその始まりにあるが⁸、だからといって知覚や感覚だけでは観念の形成はない。あるいは、コンディヤック自身の示す例でいえば、「種子」はそれ自身では発芽せず、適温、適度の水分などを必要とする。『人間認識起源論』の序論の最後で、コンディヤックは次のように述べている。「記号使用こそが我々の持つあらゆる観念の種子を発芽させる原理」(l'usage des signes est le principe qui développe le germe de toutes nos idées)である。すなわち、ここで問題なのは、発芽=成長=発展なのであり、その運動を起こすのが「記号使用」という archè にほかならない⁹。

そして、コンディヤックの『論理学』の「言語の形成をつかさどったメタフィジークは、今日のような学問ではなく、自然から与えられた本能だった」という箇所をデリダは引用し、発展が起こるのは「それ自体は変更不可能な素材の組み合わせないし変様によってだけである」と述べる。本能は、あるいは感覚は、既に分析し認識し判断しているが、最初の素材としての感覚という起源に言語を通して形式が与えられ、相互に組み合わせられて複雑な知識を生み出す。こうして、コンディヤックの考えるところ、人間の認識・知性は感覚の活用にほかならず、人間認識起源論とは素材の活用の理論なのである。デリダは、「コンディヤックの体系において、組合せ理論はエネルギー理論であり、分類上の要素は産出能力である」という (p.28、邦訳p.22)¹⁰。

⁸ 「感覚の能力は魂のあらゆる能力の最初のものであり、他の能力のただ一つの起源でさえある。そして、感覚をもつ存在はただ変化するだけなのである」(La faculté de sentir est la première de toutes les facultés de l'âme ; elle est même la seule origine des autres, et l'être sentant ne fait que se transformer) 『動物論』。

⁹ デリダはコンディヤックの『論理学』(La Logique, ou les premiers développements de l'art de penser) から「私たちの観念や能力の発展はただ記号を介してのみ起こり、記号がなければ起こらないだろうことに私は着目した」(Nous avons remarqué que le développement de nos idées et de nos facultés ne se fait que par le moyen des signes, et ne se ferait point sans eux) という箇所を引用している (p.29、邦訳p.23)。

¹⁰ 本論の注13参照。

こうして、デリダの見るところ、コンディヤックの「慎ましい形而上学」には2種類あり、一つは上記のような既に感覚から形成された人間の認識・知性という自然としての形而上学、もう一つはその道筋を反省する形而上学である。感覚を活用する言語活動の実践と、後からやってきその実践を反省し説明する理論である。そして、デリダは、『起源論』は一貫して記号論である、と述べる(p.91、邦訳p.79)。

しかし、それは既にロックが『人間知性論』で述べていたことなのではなかっただろうか。

第2章 言語、記号、観念

第1節 ロック『人間知性論』における言語

ロックも『人間知性論』の第1巻の「第1章 序論」において、「私の目指すところは、人間の真知の起源と絶対確実性と範囲 (the original, certainty, and extent of HUMAN KNOWLEDGE) を研究」することだと述べている (邦訳 p.67)。こうした構想に基づいて、この書は、第1巻において生得観念説を退け、第2巻において観念がどのようにして獲得されるかについて述べ、第3巻においてその際に言葉はどのような働きをするかを説明する。そして最後の第4巻の最後で、学問には、自然学、倫理学、論理学の3部門があると述べる¹¹。

しかし、コンディヤックはこのようなロックの言葉の理解は不十分であると考え。その理由は次のようなものである。「ロックは、言葉とその使い方が我々人間の持つ観念に関する原理に光を投げかけうるものであることを知ったのであるが (『知性論』第3巻第8章§1)、しかしそれに気づくのがあまりに遅かったために、本来ならばその著作の第2巻の主題とされるべき問題を第3巻になるまで扱っていない。もしこの著作を新たに書き直すことができたとしたならば、人間の知性を働かせている様々のばね仕掛け [メカニズム] についてロックはもっと豊かな考察を展開したであろうと推測されるのである。それがなされなかったため、人間の認識の起源についてはロックはほんの少し触れただけで通りすぎてしまった」 (『人間認識起源論』序論)。そして、観念を繰り

¹¹ このような古代ギリシアの学問分類を思い起こさせる論述において、ロックは論理学と記号論を同じように扱っている。すなわち、「3番目の部門は、セーメイオーティケー、すなわち記号論と呼べよう。記号の最も通常のもの言葉だから、ロギケーすなわち論理学と名づけるのも十分ふさわしい」と述べている (邦訳p.188)。

返し取り出したり、組み合わせたり、まとめたりして複合観念を作り出すのは随意に可能であるかのようにロックは語っているが、実際にはそれができるようになるためには長い時間が必要であり、それが可能になるために人はどのようにしてその「術を習得するのか」について示していないというのである。

コンディヤックは、ロックがもっているこのような欠点に注目し、その弱点を補うために「魂の様々な働きの生成を説明しようという」「あまりにも新しい」試みをなすものであるという。この点から再度ロックの『人間知性論』第3巻の言葉に関する議論を見ると、確かにその11からなる章のいずれにおいても、コンディヤックが『人間認識起源論』の第2部第1章の表題「言語の起源と進歩について」が示すような、言葉の歴史的発展について顧慮していないように見える。特に、先述した『人間知性論』の最後の学問の分類における記号論ないし論理学について、ロックが「物ごとを理解したり、物ごとの知識を他の人たちに伝えたりするために、心が使う記号の本性を考察すること」と述べているのを見ると、ロックの言語が言語起源論全般を意図していないことは明らかであり、したがって観念の獲得の過程において言語ないし記号がどのような働きをなすかという問題に対しても、コンディヤックの「記号使用こそが我々のもつあらゆる観念の種子を発芽させる原理」という立場からすれば、不十分なものに見えるであろう。

ロックは『人間知性論』の第2巻の第1章において観念の起源を問うのであり、それがかの有名な「タブラ・ラサ」（「心は白紙。観念はすべて経験から」）の主張になるのである。そして、人間が観念を持ち始めるのは感覚するときであると述べ（邦訳p.83）、さらには観念を持続的に保持する能力としての観想、記憶などについて述べるのは（邦訳p.95f.）、コンディヤックにも受け継がれていることである。しかし、次の第11章では、子供が観念を記憶に固定することによって次第に記号の使用を習い始め、「言葉を使うのは私たちの内部の観念の外部の印（sign）として」と述べるにとどまり、言葉や記号が人類の歴史の中で、したがって個人史においても、どのような起源をもち、どのように進歩してきたかを問うことはない。

第2節 「言語の起源と進歩について」

コンディヤックはそのような言語の進歩について、『人間認識起源論』「第2部言語と方法について」「第1章 言語の起源と進歩について」で詳しく検討する。それは、情念の叫び声や身振りから、次第に記号を獲得する過程から始まる。

そして、「記号を使用することが徐々に魂の様々な働きを開発し、今度は逆にその開発された魂の働きの方が記号を完成させ、それを使用することに慣れさせていった」 (§ 4) という、記号と魂の働きの相互作用（「互いに助け合うということ」）について述べる。そして、魂が完成されるためには記号の使用が不可欠だったことを強調する。

言葉の始まりについてコンディヤックは、叫び声を分節することによって、音が言葉に変わったことにあるとする。つまり、身振り言語が「分節音言語」によってとってかわられるのである。コンディヤックは、一方では子供の例を引きながら個人史の立場から、また他方ではオリエントや旧約聖書などの人類史の立場から、身振り言語と分節音言語との移行過程について述べる。そして、身振り言語はダンス表現¹²として長く存続したという。

その始まりは、分節音言語が抑揚、韻律によって感情を表現するようになることであるが、コンディヤックは、その人類史的な例として中国語の抑揚の豊かさに触れた後、古代ギリシア語とラテン語について検討している。そして抑揚に関するコンディヤックの記述は、当時のヴァイオリンやクラヴサン、あるいはルソーとの対立を引き起こしたラモーの和声学についても触れた後に、古代演劇における「草草が一つの芸芸とな」ったこと（*Les gestes étant réduits en art*）が取り上げられ、続いて古代ギリシア演劇、ローマにおけるパントマイムの流行などに触れる。さらに、音楽や詩について述べるが、これらは身振り言語と分節音言語が融合している諸芸術文化の例である。

コンディヤックは、次に分節音言語自身の進歩の過程をたどる。その始まりは、個別の単語にあるという。すなわち、「人はまず『木』や『果物』や『水』や『火』といった最も話題に上る機会の多い感覚的な対象に名前を付けたのであって、[初期の]言語には長いあいだ、こういう名前以外の単語はなかった」 (§ 82) のである。続けて、「こうした複合概念に含まれている様々な知覚を反

¹² ここでいうダンスについては、コンディヤックの時代は、1500年代半ばにカトリーヌ・ド・メディシスが舞踊家ベルジオジョーゾ（ボージョワイユー）をイタリアからフランスに呼び寄せルネサンス・ダンスをフランスに持ち込み、100年後に自らもバロック・ダンスを踊ったルイ14世が1661年に王立舞踊アカデミーを設立して指導者ボーシャンが5つの基本ステップによる教育を開始し、さらにはファイエによる音楽と舞踊の図による記号的表現が確立され（『舞踊術、あるいは記号、絵、記号による舞踊記述法』Raoul-Auger Feuillet : *Chorégraphie: ou L'art de décrire la dance, par caracteres, figures et signes démonstratifs, avec lesquels on apprend facilement de soy-même toutes sortes de dances*, Chez l'auteur et chez Michel Brunet, 1701）、バレエ公演の増加により1713年にはオペラ座に舞踊学校が設立されて、マリー・カマルゴ（1710～1770）、マリー・サレ（1707～1756）、バルバリーナ・カンパニーニ（1721～1799）たちがパリを賑わせていた時代であった。ファイエの記譜法については、コンディヤック自身が § 20、§ 24で触れている。

省し分析することができるようになるにつれて、人はもっと単純な観念を表わす記号を考案していった。たとえば、『木』という記号ができた後に、『幹』『枝』『葉』『青葉』といった記号が作られていったのである」(À mesure qu'on fut capable de les analyser, en réfléchissant sur les différentes perceptions qu'elles renferment, on imagina des signes pour des idées plus simples. Quand on eut, par exemple, celui d'*arbre*, on fit ceux de *tronc*, *branche*, *feuille*, *verdure*, etc.¹³) と述べる。

物の名前、すなわち名詞から始まった言語起源の問題は、次に形容詞と副詞、さらに動詞についての検討がなされ、さらに抽象的精神的な言葉について述べられる。そして、最後に考案された言葉が代名詞であるという。こうして単語についての検討を終え、次に単語の意味について検討する。そこでは、コンディヤックは、金という単語を取り出し、この言葉は当初は「黄色くて非常に重い物体という概念でしかなかった」 (§ 113) が、時代が進むに連れて金の諸性質が明らかになってゆき、したがって、同じ「金」という言葉を使用しても、その意味が万人に同じように理解されているわけではないという。つまり、コンディヤックは、歴史や社会状況において言葉の意味は変化してゆく、基本的には新しい意味が付加されてゆく (もちろん誤った理解の仕方は排除されてゆくが)、という単語自身における「進歩」についても考えていたことがわかる。だからこそ人によって同じ言葉でも様々な使い方が生じ、さらには誤解なども含んだ使用も存在し、混乱が引き起こされることになる。

コンディヤックが序論において、過去の人たちが道に迷ってしまった共通の原因を知ることを通して、そのすぐそばに正しい出発点を見出すことを目指し、その方法としてまず第1部で展開されるような魂の働きを発展段階に沿って追

¹³ 強調は論者による。この「様々な知覚」の分析や反省が様々な言語を生むという考えは、デリダが「程度の差という原理による類比的産出的機能」(le fonctionnement productif de l'analogie par le principe de la différence de degré, p.28, 邦訳p.22)として、『たわいなさの考古学』で頻繁に強調していることである。その最も重要な論点の一つが、本論注2で指摘した、デリダが『動物論』を引用しながら、「理性は本能である」と述べる箇所であろう。デリダはここで「理性は本能である」の「である」(est)をイタリック体で強調しながら、この「ある」は等しいということを表わすのでも、また「人間は動物である」というような場合の包含関係を表わすのでもなく、「程度の差」を表わすという。そして、「程度の差(したがって類比)はあらゆる述部のであるを生み出しもするが、壊しもする」という。

また、第2部の第1章第10節の§104でコンディヤックは、抽象的精神的な事柄を表わす記号は「きわめて不完全な類比しか表現しないにもかかわらず、その本質や本性を完全に説明するものだ」と、人はこう思い込みさえした」と述べている。ここにも、「慎ましい形而上学」は、類比に基づくものでなければならないという主張を見ることができる。

跡し、第2部であらゆる種類の記号使用をどのようにして我々が身につけてきたのか、そして「記号の正しい使い方とはどのようなものか」を探求しようとした、と述べるのもここからである。コンディヤックにとっては、思考の誤りは、言語の観念の起源と生成過程の理解の不完全さによるものであり、これを正しく探求することによって誤りが正されると考えたのである。たとえば、§115では次のように述べている。「ひどい言葉の誤用を犯しているときでさえ、いかに自信たっぷりに人がその言葉を使っているかということを見るのは興味深い。しかるべき警戒を全く払わないでいるにもかかわらず、人は互いに理解し合っていると思いついでいるものなのである」。「哲学者はどうかと言えば、こういう言葉の誤用を正すどころか、反対に彼ら自身が好んで曖昧な言い方をしてきた」。

コンディヤックは言語の起源と進歩についての論述を締めくくるにあたり、文字の歴史についても触れ、文字は絵画的なものから始まったという（「第13節 文字について」）。これは一方では、分節音言語は身振り言語という絵画的比喩的なものから始まったという説明に対応し、他方では絵画的な文字が次第に象徴的比喩的なものへと変化していった過程が話し方における象徴化・比喩化に対応しているという説明にも利用される（§137）。（これについては、第2部第1章の第14節で述べられる。）

以上のように、コンディヤックは、彼が目にしてきた言語の多様を、その起源と進歩という観点から説明し、その説明によって言語の多様性を一つの体系として理解しようとしたのである。それはちょうど、生物の多様をその進化の過程から説明しようとする考えに似ているであろう。そして、生物の体系が、長い時間における「進歩」によって支えられているように、言語の体系も同じく長い時間における「類比的産出的機能」が支えていたのである。「慎ましい形而上学」という「新しい学問」は、「知の獲得物を類比によって一般化しつつ秩序だて、その結果を管理しようとする」（『たわいなさの考古学』p.49、邦訳p.41）。

第3章 言葉と不在

第1節 言葉による想起

ところでその「類比」であるが、類比が可能となるためには、ある対象に関する知覚と他の対象に関する知覚とが比較されなければならない。つまり、「諸知覚の間には一つの結合関係が生まれる」（『人間認識起源論』第1部第2章第

2節§17) が必要である。それには、「ある対象が引き起こした様々の知覚を、その対象が去ってしまった後でも精神の中に存続させておく」ことができないからである。ここに、対象が不在においてもその知覚が「想起」されることが必要であり、さらに「想起」された知覚相互を結びつける力としての「想像」の働きが必要となる。その助けとなるのが記号である¹⁴。

言葉や記号を記憶の補助とする考え方は、たとえばF.ベーコンは『学問の尊厳と進歩』において、学問を分類しながら、論理学に含まれる記憶の補助、及び伝達の道具としての言葉や記号の意義を説いている。また、デカルトも『精神指導の規則』の規則4において、質料の特殊性に関わりなく「順序 (ordo) と計量的関係 (mensura) とについて求められうるすべてのことを説明するところの或る一般的な学問」として「普遍数学 (mathesis universalis)」を要請し、さらに規則16で、短い記号を使用すれば記憶は誤ることがなく、思考が分散することもない、と述べている。

しかし、コンディヤックは第1部第2章「第9節 想像力の欠陥と長所について」において、この想像の力は、もっと大きな力をもっているという。すなわち、想像力は「全く無縁な観念どうしを結びつけ結合させる能力」でもあり、「自由自在に観念を並べ替えるという想像力のこうした流儀ほど真理に背反するものはないように思われる」と述べ、想像力は単なる記憶や伝達の道具である以上の力をもつとして、その危険性についても語るのである。その力に気づいたコンディヤックはここで注をつける。「私はこれまでのところ、想像 [力] という言葉を、対象が目の前にないときにその知覚を思い浮かべざる働きという意味でしか使ってこなかった」が、「この節において、私は想像力という言葉を次のような意味で使うことにする。すなわち、様々の観念を思い浮かべながら、[それを素材にして] 想いのままに新しい観念の組合わせを作り出す働き、という意味である」(Je n'ai pris jusqu'ici l'imagination que pour l'opération qui réveille les perceptions en l'absence des objets ; ... je prends dans ce chapitre l'imagination

¹⁴ 「記号を発明することが多くなればなるほど、彼は想像力を働かせるための手段をよりたくさん手にすることになり、したがって、想像力に対するより一層大きな支配力を獲得するに至るのである」(il acquerra d'autant plus d'empire sur son imagination, qu'il inventera davantage de signes, parce qu'il se procurera un plus grand nombre de moyens pour l'exercer)、『人間認識起源論』「第1部第2章「第4節 記号の使用が、想像、観想、記憶という働きを発展させる真の原因である」(CHAPITRE IV. Que l'usage des Signes est la vraie cause des progrès de l'imagination, de la contemplation et de la mémoire.) §46。

そのほか、第1部第4章第2節§19においても、「ある事物が目の前にないときにその不在を補うための記号」(signe pour suppléer à l'absence des choses) と述べている。

pour une opération, qui, en réveillant les idées, en fait à notre gré des combinaisons toujours nouvelles)。こうして、コンディヤックは想像力が二つの異なる意味をもつことになるが、しかし特に混乱はないであろうという。

ところが、コンディヤックの次のような言葉に注目すれば、ことはそれほど簡単ではないことに気づくであろう。「もしこの働きを我々がしっかりと支配できないならば、その想像力のせいで我々は必ず誤りに陥ってしまうだろう。しかし、もしそれを統制する術を弁えるならば、想像力は我々の認識をつき動かす主要なばね [動力] にもなることだろう」(si nous ne nous rendons pas maîtres de cette opération, elle nous égarera infailliblement : mais elle sera un des principaux ressorts de nos connaissances, si nous savons la régler, § 75)。つまり、「支配(者)」(maîtres)、「統制」(régler) が可能かどうかが問題であり、そこに「もし」(si) が二度使われていることからわかるように、想像力の適切な使用は、その可能性が与えられているに過ぎず、想像力は「我々の認識をつき動かすばね」にもなり得るし、我々を誤謬へと導く「欠陥」もあわせもっている。

しかし、この「欠陥」は想像力と言葉に本質的につきまとうものである。なぜなら、コンディヤックが注で述べるような「想いのままに新しい観念の組み合わせを作り出す働き」、あるいは「自分自身で選びとった記号」「自分の意のままに呼び起こすことのできる記号」 (§ 39, § 46) は、コンディヤックが、観念とは恣意的な関係しか持たない「制度的な記号」(Les signes d'institution, ou ceux que nous avons nous-mêmes choisis, et qui n'ont qu'un rapport arbitraire avec nos idées, § 35) であり、「恣意的な記号」(signe arbitraire, § 36) と呼ぶものであり、コンディヤックはこの種の「記号を発明することが多くなればなるほど、彼は想像力を働かせるための手段をよりたくさん手にすることになり、したがって、想像力に対するより一層大きな支配力を獲得するに至る」 (§ 46) からである。

だからこそ、言語の歴史の中で育ち、想像力や言語を既に使用しているという「事実」を前にして、われわれはそのような事実としての言語活動に「着目」し、反省し、「言語の欠陥を補う」ことが必要になるのである¹⁵。誤りを含みながらわれわれの認識、精神を発展させてきた言語の歴史にあって、多くの人はこれまでと同じような言語使用を続けようとするが、コンディヤックはその起源と生成過程を振り返り、その原理・論理を見極めながら「記号の正しい使い

¹⁵ 「たわいなさの考古学」 p.99f.、邦訳 p.89。

方とはどういうものであるか」(序論)を探求しようとするのである。

第2節 たわいなさのarché-ologie、または「言葉は魂を方向づける」こと

最後に、デリダによるコンディヤック論が、なぜ「たわいなさの考古学」と呼ばれるのかについて考えておこう。

人間は、対象が知覚されずその不在においても対象の記号を用いることができる。観念とは恣意的な関係しかもたない「制度的記号」によって、人は対象の観念を「意のままに」することができる。デリダは、このような自由使用可能性によって、記号は「観念を失い、観念から離れて道に迷ってしまう」ことがあるという。(『たわいなさの考古学』p.123、邦訳p.111f.)。こうして無益な記号による「たわいなさ」が生じる。そして、「その時から、記号は何のためにもならないままであり続ける。…このたわいなさは記号に突然生じるのではない。たわいなさは記号に本来的な始まりなのである。始原、開始、号令、始動、秩序づけなのである。…その逸脱の構造のせいで、起源であること、あるいは起源を持つことが許されないので、たわいなさはあらゆる考古学に挑戦し、言ってみれば考古学にたわいなさを強いるのである」(le signe) restant dès lors pour rien, … Cette frivolité ne survient pas au signe. Elle en est la congénitale entame : l'archè, le commencement, le commandement, la mise en mouvement et la mise en ordre … Comme sa structure d'écart lui interdit d'être ou d'avoir une origine, elle défie toute archéologie, la condamne, pourrait-on dire, à la frivolité.)。

こうして、言語を可能にし、人間に精神の発展をもたらす類比の産出的機能は、常に既に「逸脱」「漂流」を始めており、無価値なもの、たわいなさを生んでいるというのである。記号が可能のために必要とされる自由使用可能性が生み出してしまう「たわいなさ」は、記号、あるいは人間認識の起源と共にありながら、記号や人間認識の起源とはなり得ないのである。

このような「たわいなさ」は認識・知性のみならず、意志の領域においても起こる¹⁶。知性と意志をつなぐものは欲望(désir)と欲求(besoin)の関係である。

知性の面から言えば、次のようになる。われわれは対象を知覚する。そして、知覚から諸観念を作りあげる。そして、それら諸観念を相互に結合させ、複雑な観念を作ってゆく。コンディヤックは、こうした「魂の働き」、「様々の観念

¹⁶ ただし、コンディヤックは知性と意志を対立的に考えているわけではない。『人間認識起源論』第5章§10参照。

を結合させる原因は、それらが同時に現れるとき我々がそれらに対して払う注意をおいて他にはない」が、それらが我々の注意を引くのは「我々の欲求との関係」からである¹⁷。

意志の面から言えば、次のようになる。「欲求」は必要なものを持っていないことによって引き起こされる不快や不安であるが、その不快や不安にどのような対象に対して「身体と魂のすべての能力の働き」を向けるべきかを明らかにし、方向づけ、決定する (déterminer) のが欲望の働きである。欲求は満たされることを求め、欲望はどのようにしてそれを満たすべきかを教える。こうして、「欲望は意志を生み出すか、あるいは意志へと変化する」。

以上のように、コンディヤックにおいて、欲求は知性と意志の間にあり、両者をつなぐ働きをしている。ゆえに、デリダは、「欲求はコンディヤックの体系の唯一の原理であるように思われる」という。

このような欲求と欲望が、記号がその始まりにおいてもたらずとされる「たわいなさ」に関してどのような位置をもつことになるのであろうか。

デリダは次のように言う。一方では、たわいなさは、欲望によって欲求に現れる。つまり、欲求を欠くか不十分なまま作動した欲望は、たわいないものである。欲求という「内在的な力」を持たずして、向かうべき対象を表象してしまうのである。記号がそのような行き過ぎた表象を許し、あるいは強いてしまうのである。

他方では、欲求に対して欲望を持たないか不確かである場合には、欲求は「閉ざされて」おり、「石のようなまま」である。欲求を表象作用の中に位置づけ、社会化ないしは精神化するのが欲望である。このような欲望の働きをもたない時、「欲求自体がたわいない」(p.145、邦訳p.133)。

こうした欲求と欲望との関係が作り出す2つのたわいなさに対し、さらにもう一つ別の問題があるとデリダはいう。それはコンディヤックの『動物論』の次のような言葉に見出せる。「あらゆる欲求のうち最も差し迫ったもの、つまり欲望することへの欲求」(au plus pressant de tous nos besoins, celui de désirer)。

¹⁷ ここで「人間認識起源論」の訳者である古茂田宏は、訳注44で次のように指摘している。「表象の世界に現れる様々な対象【の観念】のいくつかを選択的にとらえ、それらを結合させることによって具体的な知覚・認識が成立する。これを行う注意の働きが、根底において欲求besoinに支えられて規定されているというのは、コンディヤックの認識論において決定的に重要な論点をなしている」と述べ、続いて、『論理学』において、「知覚される風景において何が主要で何が主要でないかを決定するのは「自然」であると言われるが、その自然とは対象的な自然のことではなく、『自然、すなわち人間の欲求』を意味するのである」と述べている。

コンディヤックは、もし我々のすべての欲望が満たされたならば、つまり欲望が向かうところの対象のすべてが手に入ったならば、もはや我々は「満足させる」ということができなくなってしまう、だからこそ、「欲望する」という欲求こそが最も差し迫ったものだというのである。欲望がなければ、つまり魂を何かに向けるということがないことは、我々にとって最も不快なことであり、そこには「おしつぶされそうな空虚」、倦怠しか残らず、したがって「私たちはもはや欲望するためにだけ、欲望する限りでだけ生きる」(nous ne vivons plus que pour désirer et qu'autant que nous désirons) のである。

おわりにかえて

人間は、言語を獲得することによって、動物がもっているものとは異なる新しい欲求を手にするようになった。それは「自然に属しているのではない。あるいは、自然 — 人間の — に属しているとしても、それは獲得する能力のようなものである」とデリダはいう。動物的な生命活動における欲求ではなく、人間が魂の働きと言葉の使用によって獲得した精神活動によって、動物とは異なる「思いもかけないような快と苦が私たちには生じる」(『動物論』) のである。

このような、欲求と欲望との逆転を、デリダは「補足的な屈曲というたわみ」(se plier d'une flexion supplémentaire) と表現する。この新たな、そして人間の精神がもつことになった逆転は、上記の2つの「たわいなさ」とは異なる、「別のたわいなさを生み出し始める」(p.146、邦訳p.135) ことになる。

デリダによれば、比較と類比において、「欲求の出現」(surgir) と「欲望への変容」(se modifier、修正する) が生まれるが、それは比較や類比が「時間の裂け目が開くこと」を通してであるという (p.141、邦訳p.129)。

以上のような「あらゆる考古学に挑戦」する「たわいなさ」が、「である」ではなく「類比」によって生み出される時間の問題とどのように関係するかについての検討は、別の機会に委ねることにしたい。